

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



エリア・コンサルティング

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT (主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナ―）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意匠研究所代表）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー・高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」

「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。神奈川県選出の匠、からくり箱職人・川島英明さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。



木作品としても美しい仕上がり



バイヤーに「からくり箱」の魅力を伝える川島さん



1月18日、プレゼンテーションにて

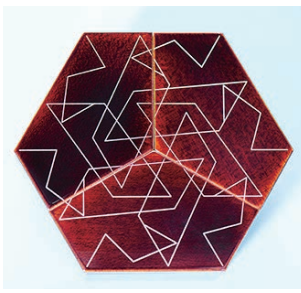
「雪どけ」という美しい名前

からくり箱職人、川島さんの作品は「雪どけ」と名付けられている。箱の盤面に雪の結晶が彫り込まれた六角形の漆塗りの箱だ。川島さんが考えた「仕掛け」によって簡単には開けられない。「春」というテーマでスタートした作品づくり。春といえば「新学期」「桜」などが思い浮かぶ。川島さんが連想したのは「雪どけ」だった。雪の結晶が溶けて崩れる、ということ仕掛けのモチーフにした。結晶の模様が特徴の盤面は、実は三枚の板で構成される。この三つを同時に横にずらすと内部のロックが外れ、中箱が真下に滑り出してくる仕掛けだ。しかし、盤面の結晶模様が現在の姿になるまでには紆余曲折があった。2016年10月、「雪どけ」を制作中の川島さんの工房をサポートメンバーが訪ねた。

世界に一つのからくり箱誕生

「漆の色味や種類、作品の程好い寸法、作品のターゲットの再確認を行いました」と川島さん。「そのとき、盤面の雪の意匠が現状では雪に見えないという指摘があり、グラフィックデザイナーに考案してもらうことになりました。」

サポートメンバーの紹介でDIGRAMの鈴木直之氏の事務所へ伺い、実際に作品に触れてもらった上でデザインしていただいたんです。その案は手加工では工作不可能だった。川島さんはNCルーターというコンピューター制御の加工機械で模様を彫ることにした。しかし、ルーターのオペレーターも漆板の加工は初めてだという。刃の回転速度や送り速度の調整など二人で試行錯誤を続け、現在の模様を彫り上げた。「いい経験になりました。今回のもの以上に複雑な意匠でも加工可能と分かっていたのは大きな収穫です。」



漆塗りで仕上げた「雪どけ」



雪の結晶をイメージした模様を崩すと中箱が静かに降りてくる

漆塗り職人と重ねた話し合い

「雪どけ」のもう一つの特徴が、盤面の仕事を難しくしていた漆塗りの仕上げだ。小田原・箱根に古くから伝わる漆塗りの技法を、今回のプロジェクトを通じて、ぜひ全国に紹介したかったという。「中箱が滑り出すときは、つららの先端からとけた水が一滴したたり落ちるように、



神奈川の伝統工芸をアピール



川島 英明
神奈川県／からくり箱職人

1985年、神奈川県横浜市保土ヶ谷区生まれ。幼少の頃より物作りに没頭する。2007年、武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業（照明専攻）。就職活動中からくり箱の世界と出会い、職人になることを決意。卒業と同時にからくり箱の第一人者、亀井明夫氏に弟子入りし、からくり創作研究会に参加。以降、立方体をベースとしたからくり箱の創作を精力的に続ける。



仕掛けに適した木材を選んで使う

からくりが人と人をつなぐ

川島さんが大切にしているのは、作り手とそれを受け取った人との間のコミュニケーションだ。「からくり箱の魅力は、伝統工芸品として差し出して終わりではないということ。一般に工芸品は作家からの一方通行になる。しかし、からくり箱は作者と受け手の間に対話が生まれます。からくりを解こうとする人同士でも会話が広がる。私を作った一つの箱が、それを手にする人との会話のきっかけになり、どんどん広がっていく。こんなに楽しいことはありません。今回の匠プロジェクトでも、サポートメンバーの皆さんや全国の方との間で、からくり箱を仲立ちにしたコミュニケーションの機会を得ました。このプロジェクトを一つのきっかけに、新たな創作に挑戦したいと思っています。」

川島さんが肌身離さず持つノートには、数え切れないほどのアイデアが書き留められている。この次はどんなからくりで人を驚かせませるか、川島さんは今日もアイデアをひねり、そして工作機に向かう。

江戸時代から箱根に伝わる「からくり箱」若き職人が新たな意匠で受け継ぐ

川島英明 神奈川県／からくり箱職人